昼飯大塚古墳連続講座

第1回講座

テーマ：「古墳の調査・研究の動向と昼飯大塚古墳～15年の調査のあゆみ～」

講　師：阪口 英毅（ひでき） 先生（京都大学大学院文学研究科　助教）

いよいよ昼飯大塚古墳の整備工事が始まりました。ここに至るまで、史跡公園の整備をみすえた範囲確認調査が開始された1994年から数えて、15年の歳月が流れました。この間、調査は2007年の第11次まで積み重ねられ、墳丘の正確なかたちや大きさ、墳丘をめぐる埴輪や葺石のようす、後円部に埋納された三つの棺の存在など、さまざまなことが明らかとなりました。

今回は、こうした調査の成果に加え、どのような方法、工夫によって調査を進めたか、いってみれば調査の舞台裏をご紹介します。通常の発掘調査のほか、遺物分布調査、物理探査、ボーリング調査などを実施し、記録には石室の全方位撮影、墳丘の三次元計測などを導入するなど、状況に応じてさまざまな方法が取り入れられました。また、IT技術を利用したガイダンス装置の開発など、今後の史跡としての活用を念頭に置いた試みも進められています。昼飯大塚古墳が、史跡としてはもちろん、調査や整備に対する取り組みの面でも、全国的にみてもユニークな存在であることを、是非知っていただきたいと思います。

第2回講座

テーマ：「古墳の保全に向けた地盤工学の役割 ～高松塚古墳を例として～」

講　師：三村（みむら）　衛（まもる） 先生（京都大学防災研究所　准教授）

高松塚古墳は1972年3月に奈良県明日香村において発見され、石室内部に極彩色の壁画が見つかったことで一躍有名となり、壁画は国宝に、古墳は特別史跡に指定され、現地保存されてきました。ところが、国宝壁画がカビや細菌、虫類による生物被害、および地震による墳丘地山の亀裂や漆喰の劣化による物理的被害によって危機的状況に陥ったため、恒久保存対策として石室を解体し、壁画を温湿度管理の行き届いた環境下において修復することになりました。これを受けて、2006年10月～2007年9月にかけて古墳の発掘調査と石室解体が行われました。通常の発掘調査とは異なり、石室解体という土木工事的な側面を併せ持つ調査となったため、現地において墳丘地盤強度を評価するための原位置試験を実施しました。また乱さない試料を採取して墳丘土の物理特性と力学特性を室内試験によって把握し、石材取り出し時のクレーン基礎地盤の支持力と墳丘壁面の安定性についても併せて検討しました。締固め盛土構造物としての古墳の強度・安定性の確保が遺跡の保全と整備には不可欠であり、遺跡としての歴史的価値の保持との両立に向けた取り組みについて、高松塚古墳における事例に基づいて工学の立場からお話ししたいと思います。

昼飯大塚古墳周辺マップ

アクセス

- JR美濃赤坂駅から徒歩25分
- JR大垣駅南口から名阪近鉄バス「赤坂総合センター行」乗車、終点下車、徒歩3分
- 名神高速道路大垣ICから国道258号線、21号線、417号線経由で13km
- 名神高速道路関ヶ原ICから県道216号・赤坂垂井線経由で11km

「おいじゃーす」歴史観光グループ

私たちは大垣および西濃地域における歴史的、文化的、伝統的、民俗的遺産の調査、発掘、研究により、その成果を基礎に活用、保存、再建などによる自主的なまちづくりをすすめ、地域の発展をはかることを目的として、平成11年に結成され、会員は、サラリーマン、自営業者、主婦、学生、定年退職者など多様な構成です。